

Title	思考動詞の条件形「思うと」に関する一考察
Author(s)	河, 在必
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2009, 43, p. 39-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10114
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

思考動詞の条件形「思うと」に関する一考察

河 在 必

1. 問題のありか

本稿では、思考動詞の条件形「思うと」が、本動詞性を失いつつ、いわば接続助詞化する場合について考察する。

次の例1、2の「思うと」と、例3、4の「思うと」とを比較されたい。

1) 「雪をハンディだと思うと負ける」が北国のチームの合言葉だ。

(毎日新聞940309・夕刊1面)

2) 米沢夫妻は何ひとつ疑っていない。むしろ事件によって靖子が被る様々な弊害について心配してくれている。そんな二人を欺いていると思うと心が痛んだ。

(容疑者Xの献身)

3) もうもうと、けむりのように白い砂ぼこりをたてて、バスは目のまえを通りすぎようとした。と、そのまどから、思いがけぬ顔が見え、「あら、あら!」といったと思うと、バスは走りぬけた。大石先生なのだ。

(二十四の瞳)

4) とつぜん、慈念は掌を頭の上にふりあげたと思うと、水面に向かってハッシと何か投げつけた。

(雁の寺)

例1、2の「思うと」は、思考活動を表す本動詞「思う」の条件形であり、例1では、一般的な仮定条件を表し、例2では、個別的な既定条件(主文の出来事の成立を促すきっかけ)を表している。一方、例3、4の「思うと」は本動詞性がなくなっている(薄れている)。この違いは、例1、

2の場合には(多少意味が異なってくるが)、「思うと」は「思ったとたん」に言い換えることができるのに対して、用例3、4の場合には、「思ったとたん」とは言えず、「いったとたん」「ふりあげたとたん」に言い換えられるようになる点から分かる。ここから、「と思うと」全体で接続助詞化していると考えられるのである。

1') 「雪をハンディだと思うと負ける」が北国のチームの合言葉だ。

→ 〈思ったとたん〉

2') そんな二人を欺いていると思うと心が痛んだ。

→ 〈思ったとたん〉

3') 「あら、あら！」といったと思うと、バスは走りぬけた。

→ 〈いったとたん〉

4') 慈念は掌を頭の上にふりあげたと思うと、水面に向ってハッシと何か投げつけた。

→ 〈ふりあげたとたん〉

さらに、例3、4の場合では、「～と思うと」を「～かと思うと」に言い換えることが可能になる。

3'') 「あら、あら！」といったかと思うと、バスは走りぬけた。

→ 〈いったかと思うと〉

4'') 慈念は掌を頭の上にふりあげたかと思うと、水面に向ってハッシと何か投げつけた。

→ 〈ふりあげたかと思うと〉

本稿では、思考活動を表す本動詞の条件形「思うと」の場合と、接続助詞化した場合では、何が違ってくるのかについて考察する¹⁾。

2. 先行研究

本稿が扱う形式のうち、接続助詞化した形式については、既に、北条(1964)、森田・松木(1989)、グループ・ジャマシイ(1998)に記述されている。

北条(1964)では、「かと思うと」「かと思ったら」「かと思えば」について、次のように述べられている。

- 前件の事柄、行為が行われた直後に後件の事柄、行為が行われるという意味で、扱う事柄は表現主体の視覚、感覚でとらえられるものに限られる。
- 具体的な状況説明を行い、前件と後件には、「晴れる－降る、帰ってくる－外へ飛び出す」など対照的な意味をもつ語がくることが多い。

森田・松木(1989)では、同時性を表す形式として、「(か)と思うと」「(か)と思えば」「(か)と思ったら」をあげ、対比を示す形式として、「かと思うと」「かと思えば」をあげている。同時性の場合については、次のような指摘がある。

- “～するとすぐに” “～とほとんど同時に” の意で前件と後件がほぼ同時に起こることを示す表現である。
- 動詞の連体形や完了の助動詞「た」を受ける。
- 話し手の主観(あくまでも話し手がとらえたに過ぎない“同時性”)を前面に押し出す。(この点で、客観的な態度を貫く「と同時に」等とは異なる。)

対比を示す「かと思うと」「かと思えば」については次の指摘がある。

- 動詞の連体形や完了の助動詞「た」をうけ、「Aかと思うとB」の形で、性質の大きく異なる一時には正反対の－A Bが時を隔てず立

で続けに起こることを表す。

グループ・ジャマシイ (1998) は、「かとおもえば」「とおもったら」「とおもうと」を取り上げ、それらの違いを次のように述べている。

「かとおもえば」

- 「-るかとおもえば」「-るかとおもうと」の形で、現状が話し手の予想に反していることがらを表す。
- 予想に反することがらが繰り返して生じたり、現状が予想に反しているということを表す表現なので、文末には辞書形をとるのが普通である。（「かと思ったら」は用いられにくい。）

「とおもったら」

- 「-たとおもったら」「疑問詞…かとおもったら」の形で、話し手が不思議に思って注目する様子を表し、後ろには意外な発見や驚きをさそう出来事が表される。

「とおもうと」

- 「-るかとおもうと」「-たとおもうと」の形で、二つの対比的なことがらがほとんど同時につづいて起こることを表す。
- 「-たとおもったら」「-たとおもえば」「-たかとおもったら」の形ももちいられる。
- 後ろには話し手の驚きや意外感を表す表現が続くことが多い。

以上から、次の6つの形式間の共通性と違いを精密に分析する必要があることが分かるが、本稿では便宜的に「～と思うと」「～かと思うと」に限定し、本動詞である場合とそうではなくなっている場合において、それぞれの形式が接続する部分の構造的な違いに注目して分析を行いたい。

～と思うと ～と思ったら ～と思えば
～かと思うと ～かと思ったら ～かと思えば

以下、「～と思うと」について分析した上で、「～かと思うと」の場合に

ついて述べ、両者の共通性と違いについて指摘する。

3. 「～と思うと」の場合

まず、本動詞の場合の特徴について述べ、接続助詞化した場合にはどのような限定が起こってくるかについて記述する。

3. 1 本動詞の場合

「思うと」が思考活動を表す本動詞の場合には、2つの特徴がある。

第1に、本動詞の条件形であるので、「思うと」「思っていると」「思わないと」「思いますと」のように語形変化をする(当該部分には実線を施す)。

- 5) (次は開けて見せろというのだろうと思っていると、係官は突然、/
「オミヤゲは？」/と、日本語で聞いた。(シベリア鉄道殺人事件)
- 6) 全力で投げることだけを考えた。悔しいが、打たれてもともと思
わないと投げられない。(毎日新聞970419・朝刊スポーツ面)
- 7) 少しでもお役に立てれば幸いです。不安な思いで過ごされていると
思いますと、とても胸が痛みます。(毎日新聞041102・朝刊総合面)

第2に、思考内容を表す引用節には、「した」「する」「している」「～だろう」「～のだ」「しなければならぬ」「しない」等、様々なテンス、アスペクト、モダリティー、極性の述語が現れうる。また、例14、15のように、形容詞や名詞述語も可能である(当該部分に実線を施す)。

- 8) 「今でも、息子の手が私の肩に触れているような気がします。畳や
冷蔵庫、階段すら、息子の手や足が触れたと思うと、いとおしくて泣
けてきます」(毎日新聞010824・夕刊社会面)
- 9) 風がつめたかった。間もなく冬が来る、と思うと、心細かった。

(冬の旅)

- 10) この手で未来の森を作っていると思うととてもワクワクし、充実した一時でした。(毎日新聞060904・朝刊解説面)
- 11) いま頃これと殆ど同じ弁当をデラ安も食べているのだろうと思うとなんだかおかしな気分だった。(黄金時代)
- 12) しかし、夫に言われるまでもなく、行助を少年院に送らなければならぬ、と思うと、気持ちが沈んできた。(冬の旅)
- 13) このままでは点が取れないと思うと、余裕がなくなった。(毎日新聞060813・朝刊スポーツ面)
- 14) 「中学の時が一番つらかったですよ。だんだん友達から遊びの誘いがかからなくなって。私は周りの人より友達が少なかったと思うと悲しかった」。(毎日新聞920612・スポーツ面)
- 15) ここに集まった村民は、お世話になった人たちの子孫なのだと思うと感謝の気持ちがわいてくる。(毎日新聞961123・朝刊家庭面)

3. 2 接続助詞化した場合

一方、「～と思うと」が接続助詞化すると、「思っていると」「思わないと」のような形式はありえず、「思うと」だけに語形が固定される。本動詞の場合には「思うと」が従属文の述語であるが、接続助詞化した場合には、「～と思うと」が接続した述語が従属文の述語となる。

また、従属文の述語は、基本的に動詞の完成相過去形の「した」に限定され²⁾、主文の述語も完成相になって、2つの出来事間の時間間隔のない継起性を表す。以下の例はすべて「したとたん」に言い換えることができる³⁾。

- 16) 「今、助けるぞ！」と、声がしたと思うと、ドアに体当たりしてぶ

つかる音がした。 (秘書室に空席なし)

- 17) やっと半身をおこした先生は、そうとあなの中の足をうごかし、
こわいものにさわるようなようすで、くつのボタンをはずし右の足く
びにふれたと思うと、そのまままたよこになってしまった。

(二十四の瞳)

- 18) 突然、街灯の陰から、誰かが飛び出して来たと思うと、ワッと柳へ
飛びかかって来た。 (女社長に乾杯！)

4. 「～かと思うと」の場合

この場合も、「思うと」が本動詞の条件形の場合と、そうではない場合がある。次の例19、20と例21、22を比較されたい。

- 19) 「窃盗と傷害の罪名で、ほくもすっかり驚いてしまったんです。あんなやさしい子が、どうしてそんなことをしたのかと思うと、どうも気が重くて……」 (塩狩峠)

- 20) さぶちゃんからそれをうちあげられて、あんたがどんな気持ちでいるかと思うと、いても立ってもいられなくなった。 (さぶ)

- 21) 「おとうさま」 女の子はそういつたかと思うと、両手を大きくひろげて貞行にしがみついた。 (塩狩峠)

- 22) 「こんな時間から開いてるペットショップがあるかよ」/背後からばたばたとした足音が近付いてきたかと思うと、滝沢の声が被さってきた。 (凍える牙)

例19、20の「思うと」は本動詞であり、例21、22では、「～かと思うと」全体が接続助詞化している。

本動詞の場合には、波線で示したように、思考内容を表す引用節は、疑

問文（「あんなやさしい子がどうしてそんなことをしたのか」「あんたがどんな気持ちでいるか」）である。

あるいは、次のように、引用節は、話し手の予想（「癒るか」「その後もこの調子で進むか」「幸福な家庭が始まるか」）を表し、それに反する展開が主文で提示される構造になる。後述するように、本動詞におけるこのような「話し手の予想に反する出来事の展開」という用法は、「思うと」が本動詞性を失っても保持されていくのではないかと思われる。いずれの場合であれ、「～か」（または「～のか」）は、引用節内の文末のくっつきである。

- 23) しかしなかなか治癒しない。いったん痂ができて、癒るかと思うと、その下の傷口は尚ふかく膿んでゆくようである。（楡家の人々）
- 24) こんなふうには、小説は「浮気な女房・寝取られ亭主・若い間男」のトリオを機軸にするフアブリオー（フランス小話）風のドタバタ喜劇から幕をあけるが、その後もこの調子で進むかと思うと、第二之巻あたりから、いささか様相を異にした展開を見せはじめる。
（毎日新聞030119・朝刊読書面）
- 25) やがて大佐はナチスに対する意見の相違などから婚約者エルザと別れ、マリアと結婚。幸福な家庭が始まるかと思うとナチスのオーストリア併合で、一家は自由を求めて町を脱出する。
（毎日新聞000819・夕刊芸能面）

「思うと」自体は本動詞であるため「思っていると」のようなアスペクト形式も当然可能である。

- 26) 浅見が有里のことをどう紹介しようかと思っていると、「私は浅見さんの助手の為保有里います」と勝手に自己紹介した。

(箸幕幻想)

27) 意外な展開をするので、まとまりがないのかと思っていると、最後に一堂に会するの。珍しいほどよくできた映画だと思います」

(毎日新聞990611・夕刊芸能面)

一方、例21、22では、「～かと思うと」全体が接続助詞化していて、2つの出来事間の時間間隔のない継起性を表しているため、次のように言いかえることができる。

21') 女の子はそういったかと思うと、両手を大きくひろげて真行にしがみついた。

→ 〈そういったとたん〉

22') 背後からばたばたとした足音が近付いてきたかと思うと、滝沢の声が被さってきた。

→ 〈近付いてきたとたん〉

従って、用例21、22の場合には、「～と思うと」に言いかえることができる。

21'') 女の子はそういったかと思うと、両手を大きくひろげて真行にしがみついた。

→ 〈そういったと思うと〉

22'') 背後からばたばたとした足音が近づいてきたかと思うと、滝沢の声が被さってきた。

→ 〈近づいてきたと思うと〉

このように、本動詞の場合とは違って、接続助詞化した場合には、「～と思うと」と「～かと思うと」の言いかえが可能になる。

以上は、従属文の述語が「した」であって、2つの出来事間の時間間隔のない継起性を表す場合であったが、次のように、従属文の述語が継続過去形の「していた」「している」である場合には、「～かと思うと」を「～と思うと」には言いかえにくい。この場合、波線で示したように対比的な2つの出来事を表し、主文に「急に」「とうとう」「不意に」「突然」のような副詞を伴うのが特徴的である。

- 28) 翌日まで、南嶽はひと言も口をひらかなかった。太いびきをかいて苦しそうに咽喉をならしていたかと思うと、それが急にとまって息をしなかつたりした。 (雁の寺)
- 29) 「まだあるんですよ。五六年、志津子は貞子を連れて故郷に戻んですが、まるで別人のようにやつれ、従兄弟が何を聞いても答えようともせず、塞ぎこんで意味不明のことをぶつぶつ唱えていたかと思うと、とうとう三原山の火口に身を投げて自殺してしまったのです。三十一歳でした。」 (リング)
- 30) 焼跡の様子は昨日とあまり変らない。そこかしこにいる骨探しの人たちが、お尻を立てて前かがみになっているかと思うと不意に腰をのばし、また前かがみになったりして潮干狩の光景を思わせた。 (黒い雨)
- 31) 朝、夢からさめて「ああ、夢でよかったー」と心底思うことがある。夢の中の出来事ほど、ほどを超えたものはない。誰かに追われて逃げ回っているかと思うと、突然歯科医院の隣のいすにヤンキースの松井選手が座っていたり、とにかくしっちゃかめっちゃかだ。 (毎日新聞940915・夕刊総合面)

以上の例を考察すると、従属文が表す出来事の継続性が突然断ち切られて、それに対立する意外な出来事が成立するといった文体的効果があると

思われる。従属文が表している出来事は、例32のような本動詞の場合と違って、話し手の予想ではなく、現実の出来事であるが、意外な出来事の成立を主文が表す点では、本動詞における用法を保持していると思われる。

本動詞の場合（思考内容を表す）

- 32) その後もこの調子で進むかと思うと、第二之巻あたりから、いささか様相を異にした展開を見せはじめる。
(例24再掲)

接続助詞化した場合（現実の継続的な出来事を表す）

- 33) 大いびきをかいて苦しそうに咽喉をならしていたかと思うと、それが急にとまって息をしなかつたりした。
(例22再掲)

5. 「した（か）と思うと」と「したとたん」の比較対照

本動詞の場合と接続助詞化した場合の違いを示す指標として、「とたん」を使ってきたが、当然、「した（か）と思うと」と「したとたん」は同じ意味ではない。両者が言いかえられやすい場合とそうではない場合がある。

言いかえやすいのは、先行研究でも指摘されているように、話し手（小説の地の文では、作中人物あるいは語り手）が知覚した具体的な出来事を表す場合である。

- 34) 「クサビ形の波が立ったと思うと、馬の頭のような大魚が姿を見せた」
(毎日新聞951002・朝刊総合面)

→ 〈立ったとたん〉

- 35) 婦人は布包みを肩で揺すりあげ、俯いたかと思うと発作を起したように泣きだした。
(黒い雨)

→ 〈俯いたとたん〉

従って、次のような場合には、「したとたん」は使用できるが、「した（か）

と思うと」は使用できない。

①物や人の一般的な性質を述べる場合

36) これまで、花粉が鼻に付いたとたん、水分で溶け、中の抗原に反応して症状が出ると思われていた。 (毎日新聞911026・社会面)

37) 女は出家したとたん、さっと心の丈が高くなるんです。

(新源氏物語)

②従属文と主文いずれかの主体が1人称の場合

38) ある時、彼と私は研究上の話をしていたのだが、私が何かを言ったとたん、彼はウンとうなって指を唇にあてがったまま、突然私の研究室を出て行ってしまった。 (若き数学者のアメリカ)

39) 「会場の雰囲気はとても楽しかった。でも、聖火がついたとたん、思わずポロリと涙がこぼれた」。小谷さんが振り返った。

(毎日新聞920627・社会面)

③主体が3人称であっても、「思い出す」「気づく」「感じる」のように内的活動を表す動詞で、話し手が知覚できない場合。

40) 「さーよーこちゃん」呼びかけたとたん、くるみは小夜子ちゃんちのうわさを思い出していた。 (毎日新聞010713・朝刊特集面)

41) そこに佇んでいるのが浅見ではなく、大津皇子の亡霊ではと気がついたらとたん、有里は頭が混乱した。 (箸墓幻想)

以上から、「した(か)と思うと」は、先行研究で指摘されているように、客観描写ではなく、話し手の知覚を通した2つの出来事間の時間間隔のない継起性を表すと考えられる。本動詞である「思うと」は思考活動を表すのだが、その語彙の意味を知覚活動へと一般化しつつ、接続助詞化が進行していつていると考えられるのである。本動詞「思う」の語彙の意味は薄

れつつも保持されていて、話し手の主観を通した時間間隔のない継起性を表すことが重要であろう。

6. まとめ

本稿では、本動詞として使われる「思うと」の場合と、接続助詞化した「～と思うと」「～かと思うと」をとりあげ、まず、本動詞の場合と接続助詞化した場合の違い、そして、「～と思うと」と「～かと思うと」の共通点と相違点を確認した。まとめると次のようになる。

「～と思うと」における「思うと」が本動詞の場合、①語彙の意味として思考活動を表し、②「思っていると」「思わないと」のように形態論的に語形変化をする。そして、③思考活動の内容を表す引用節には、様々なテンス、アスペクト、モダリティー、極性の述語が現れうる。

一方、接続助詞化した「～と思うと」は、①「思うと」だけに形が固定され、②接続する従属文の述語は基本的に「した」に限られる。そして、③「思う」はもはや思考活動を表さず、話し手（小説の地の文では作中人物あるいは語り手）の知覚活動へと一般化されつつ、時間間隔のない継起的な2つの出来事を話し手が知覚したことを明示するようになる。

「～かと思うと」の場合でも、本動詞である場合には、①語彙の意味として思考活動を表し、②「思っていると」のように形態論的に語形変化をする。そして、③思考活動の内容を表す引用節には、話し手の疑問や予想内容が提示され、「～か」は引用節の文末のくっつきである。

一方、接続助詞化した「～かと思うと」は、①「思うと」だけに形が固定され、②接続する従属文の述語は基本的に「した」「していた（している）」に限られる。③「～か」は従属文の文末のくっつきではない。

「した」の場合には、「～と思うと」に言い換えが可能である。一方、「していた（している）」の場合には、従属文が表す出来事の継続性が突然断

ち切られて意外な出来事が成立するという、対比的な2つの出来事が提示されるため、「～と思うと」に言いかえにくい。

アスペクト的に見て、完成相である場合には、時間間隔のない継起性を表すことになる。一方、継続相の場合には、出来事の継続性を切断する意外な出来事の成立を表すことになる。どちらにおいても、「思う」の語彙的意味は保持されていて、話し手（作中人物や語り手）の主観を通した、時間間隔のない継起性であり、対比性であることが重要である。

今後は、文体差も考慮しつつ、「～と思えば」「～と思ったら」について考察を進めていきたい。あわせて、なぜ「～と思うなら」「～思ったなら」の場合には、このような現象が生じないかについても、考察したい。

注

- 1) 例を挙げる際には、例末尾の括弧内にその出典を明示するが、新聞から収集した例の場合には、その日付及び紙面を明示する。また、文学作品から収集した例の場合、原文の改行箇所をスラッシュ「/」で示す。
- 2) 「する」の形の例が見られたが、これらの例は「した」の形に言いかえることができる。
 - リットン報告書よりもみんなの耳目を集めた「玉ノ井バラバラ事件」が起ると思うと、白木屋が火災を起し、屋上に避難した客はそこに飼われていたライオンの吼え狂う声にいつそう肝をつぶしつつ、飛来した陸軍機から投下されたロープにすがって救助された。（楡家の人々）
- 3) 「していた」の例が新聞から収集したなかに少数だけが見られた。どちらも、反復的な出来事を表している。
 - 見ていると、とにかくよく動く。掃除機をかけ、床をふいていたと思うと、アイロンをかける合間にベランダの花に水をやる。
(毎日新聞940914・夕刊総合面)
 - 先月初旬、その軒先にツバメが巣を作り、先日のぞいてみるとヒナが数羽かえっていました。親ツバメはヒナを抱えていたと思うと、エサをくわえて来ては与えています。
(毎日新聞970707・朝刊社会面)

用例出典

本稿では、手拾いで収集した用例のほか、『CD-ROM 版新潮100冊』『CD-毎日新聞』（1991年から2006年版まで）からも用例を収集している。『CD-毎日新聞』は、大阪大学文学研究科日本語学講座が毎日新聞社と交わした利用許諾契約・覚書にもとづき使用したものである。以下、手拾いで収集した用例のうち、本文にあげた例の出典を示す（五十音順）。

赤川次郎（1992）『秘書室に空席なし』講談社文庫 内田康夫（2001）『箸墓幻想』毎日新聞社 西村京太郎（1996）『シベリア鉄道殺人事件』講談社文庫 乃南アサ（1996）『凍える牙』新潮社 東野圭吾（2008）『容疑者Xの献身』文藝春秋 山田宗樹（2004）『嫌われ松子の一生〈下〉』幻冬舎文庫

参考文献

- 奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8. 6-16.（『ことばの研究・序説』むぎ書房に所収）
- 奥田靖雄（1986）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文-その体系性をめぐって-」『教育国語』87. 2-19.
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト-現代日本語の時間の表現-』東京：ひつじ書房.
- 言語学研究会・構文論グループ（1985a）「条件づけを表すつきそい・あわせ文（一）-その1まえがき-」『教育国語』81. 19-31.
- 言語学研究会・構文論グループ（1985b）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（三）-その3条件的なつきそい・あわせ文-」『教育国語』83. 2-37.
- 古座暁子（1984）「たずねる文」『教育国語』79. 2-13.
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』東京：むぎ書房.
- 高橋太郎（1983）「動詞の条件形の後置詞化」『副用語の研究』293-316. 東京：明治書院.
- 高橋太郎（2003）『動詞九章』東京：ひつじ書房.
- 北条淳子（1964）「複文文型」『日本語教育指導参考書15 談話の研究と教育Ⅱ』国立国語研究所.
- 前田直子（2009）『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』東京：くろしお出版.
- 森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型-意味と用法-』東京：アルク.
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』東京：くろしお出版.

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

A Descriptive Analysis of a Conditional Form of Thinking Verb “*omou-to*”

JaePhil HA

“*omou-to*”, which is a conditional form of thinking verb, “*omou*”, has two usages. One is to use as a main verb and another is to use as a conjunctive particle.

In case of using as a main verb, the verb “*omou*” itself can inflect and the predicate in the quotation clause attached to it can have grammatical forms according to tense, aspect, mood, polarity, and modality. However, once it comes to use as a conjunctive particle, “*to-omou-to*”, or “*ka-to-omou-to*”, “*omou*” does not inflect and there are also constraints on the predicate in the subordinate clause where they attached to.

On the usage of the conjunctive particle, there are two main properties according to the form of the subordinate clause. When the form is “*shita*”(perfective past form), the event represented by the clause with “*to-omou-to*” or “*ka-to-omou-to*” is sequential with the event represented by the following clause. Meanwhile, when the form is “*siteita*” or “*siteiru*” (progressive past form), the events are contrastive, and the form of conjunctive particle can be only “*ka-to-omou-to*”. However, both keep its original lexical meaning though it has bleached to some extent, and both present relation between events through the subjectivity.

キーワード：思考動詞の条件形，本動詞，接続助詞化，話し手の主観